

清経

世阿弥作

ワキ 淡津三郎

ツレ 女

シテ 左中将清経

地は 京都

季は 冬

「八重の汐路の浦の波。八重の汐路の浦波。九重に
いざや帰らん。

「是は左中将清経の御内に仕へ申す。淡津の三郎と
申す者にて候。さても頼み奉り候ふ清経は。過ぎ
にし筑紫の軍に打ちまけ給ひ。都へはとても歸ら
ぬ道芝の。雑兵の手にかゝらんよりはと思し召し
けるか。豊前の国柳が浦の沖にして。更け行く月
の夜船より身を投げ空しく為り給ひて候。又船中

を見奉れば。御形見に鬢の髪を残し置かれて候ふ
間。かひなき命助かり。御形見を持ち。唯今都
へ上り候。

「此程は。鄙の住居に馴れく。く。たまく
帰る故郷の。昔の春に引きかへて。今は物うき秋
暮れて。はや時雨ふる旅衣。しをるゝ袖の身のは
てを。忍びく。に上りけり。く。

「急ぎ候ふ程に。是は早都に着きて候。如何に案

内申し候。筑紫より淡津の三郎が参りて候ふそれく御申し候へ。

ツレ「何淡津の三郎と申すか。人までもなし此方へ来り候へ。さて只今は何の為めの御使にてあるぞ。

ワキ「さん候面目もなき御使に参りて候。

ツレ「面目もなき御使とは。若し御遁世にてあるか。

ワキ「いや御遁世にても御座なく候。

ツレ「過ぎにし筑紫の軍にも御つゝがなきところ聞きつる

に。

ワキ「さん候過ぎにし筑紫の軍にも御つゝが御座なく候

ひしが。清経心に思し召すやうは。都へはとても

歸らぬ道芝の。雑兵の手にかゝらんよりはと思し

召されけるか。豊前の国柳が浦の沖にして。更け

行く月の夜船より身を投げ空しくなり給ひて候。

ツレ「なに身をなげ空しくなり給ひたるとや。恨めしやせめては討たれもしは又。病の床の露とも消えな

ば。力なしとも思ふべきに。我と身を投げ給ふ事。
偽りなりつるかねことかな。実に恨みても其かひ
の。なき世となるこそ悲しけれ。

下歌地

「何事もはかなかりける世の中の。

上歌

「此程は。人目をつゝむ我宿の。く。垣ほの薄吹

く風の。声をも立てず忍音に。泣くのみなりし身
なれども。今は誰をか憚りの。有明月の夜たゞと
も。何か忍ばん時鳥。名をも隠さで鳴く音かな。

く。

ワキ詞

「又船中を見奉れば。御形見に鬢の髪を残し置かれ
て候。是を御覧じて御心を慰められ候へ。

ツレ

「是は中将殿の黒髪かや。見れば目もくれ心消え。
猶も思ひのまさるぞや。見る度に心尽しの髪なれ
ば。憂さにぞかへす本の社にと。

地

「手向けかへして夜もすがら。涙と共に思寝の。夢
になりとも見え給へと。寐られぬにかたぶくる。

枕や恋を知らすらん。く。

シテサシ

「聖人に夢なし誰あつて現と見る。眼裏に塵あつて三界すぼく。心頭無事にして一生ひろし。実にや憂しと見し世も夢。つらしと思ふも幻の。いづれ跡ある雲水の。行くも帰るも閻浮の故郷に。たどる心のはかなさよ。転寐に恋しき人を見てしより。夢てふ者は頼み初めてき。如何にいにしへ人。清経こそ参りて候へ。」

ツレ

「不思議やなまどろむ枕に見え給ふは。実に清経にてましませども。正しく身を投げ給へるが。夢ならで如何で見ゆべきぞ。よし夢なりとも御姿を見々え給ふぞ有難き。さりながら命を待たで我と身を。捨てさせ給ふ御事は。偽りなりけるかねことなれば。唯恨めしう候。」

シテ

「さやうに人をも恨み給はゞ。我も恨みは有明の。詞
見よとて送りし形見をば。何しに返させ給ふらん。」

ツレ 「いやとよ形見を返すとは。思ひあまりし言の葉の。

見る度に心づくしの髪なれば。

シテ詞

「うさにぞかへすもとの社にと。さしも贈りし黒髪を。あかずは留むべき形見ぞかし。

ツレ

「愚と心得給へるや。慰めとての形見なれども。見れば思ひの乱髪。

シテ

「分きて贈りしかひもなく。形見をかへすは此方の恨み。

ツレ

「我は捨てにし命の恨み。

シテ

「互にかこち。

ツレ

「かこたるゝ。

シテ

「形見ぞつらき。

ツレ

「黒髪の。

地

「恨みをさへに言ひそへて。く。くねる涙の手枕を。ならべて二人が逢ふ夜なれど。恨むれば独寐の。ふしぐなるぞ悲しき。実にや形見こそ。中々

憂けれ是なくは。忘るゝ事もありなんと。思ふもぬらす袂かな。く。

シテ詞

「古への事ども語つて聞かせ申し候ふべし。今は恨みを御晴れ候へ。さても九州山鹿の城へも。敵よせ来ると聞きし程に。取る物も取りあへず夜もすがら。高瀬船に取り乗つて。豊前の国柳といふ所に着く。

地

「実にや所も名を得たる。浦は並木の柳蔭。いと仮

初の皇居を定む。

シテ

「それより宇佐八幡に御参詣あるべしとて。

地

「神馬七疋。其外金銀種々の捧物。即ち奉幣のためなるべし。

ツレ

「かやうに申せば猶も身の。恨みに似たる事なれども。さすがに未だ君まします。御代のさかひや一門の。果をも見ずして徒に。御身一人を捨てし事。誠によしなき事ならずや。

シテ「実にく是は御理りさりながら。頼みなき世のし
るしの告。語り申さん聞き給へ。

地「そもく宇佐八幡に参籠し。さまぐ祈誓怠らず。
数の頼みを掛卷も。忝くもみとしろの。錦の内よ
り新なる。御声を出だしてかくばかり。

シテ「世の中の宇佐には神もなき物を。何いのるらん心
づくしに。

地「さりともと思ふ心も虫の音も。弱りはてぬる秋の

暮かな。

シテ「さては仏神三宝も。

地「捨てはて給ふと心細くて。一門は。氣を失なひ力
を落して。足弱車のすごくと。還幸なし奉る。
あはれなりし有様。

クセ「かゝりける処に。長門の国へも。敵むかふと聞き
しかば。また船に取り乗りて。何くともなくおし
出だす。心の内ぞあはれなる。実にや世の中の。

うつる夢こそ誠なれ。保元の春の花。寿永の秋の
紅葉とて。散々になり浮ぶ。一葉の船なれや。柳
が浦の秋風の。追手がほなる跡の波。白鷺の群れ
居る松見れば。源氏の旗をなびかす。多勢かと肝
を消す。こゝに清経は。心にこめて思ふやう。さ
るにても八幡の。御託宣あらたに。心魂に残るこ
とわり。誠正直の。頭にやどり給ふかと。唯一筋
に思ひ取り。

シテ「あぢきなや。とても消ゆべき露の身を。」

地「猶置き顔に浮草の。波に誘はれ。船にたゞよひて
いつまでか。憂き目を水鳥の。沈みはてんと思ひ
切り。人には言はで岩代の。待つ事ありや暁の。
月に嘯く気色にて。船の舳板に立ちあがり。腰よ
りやうでう抜き出だし。音も速に吹き鳴らし。今
様を歌ひ朗詠し。来し方行く末をかゝみて。終に
はいつかあだ波の。帰らぬは古へ。止まらぬは心

づくしよ。此世とても旅ぞかし。あら思ひ残さず
やと。よそ目にはひたふる。狂人と人や見るらん。
よし人は何とも。見る目を仮の夜の空。西にかた
ぶく月を見れば。いざや我もつれんと。南無阿弥
陀仏弥陀如来。迎へさせ給へと。唯一声を最期に
て。舟よりかつぱと落汐の。底の水屑と沈みゆく。
うき身の果ぞ悲しき。

ッレ「聞くに心もくれはとり。憂き音に沈む涙の雨の。

恨めしかりける契りかな。

シテ「いふならく。那落も同じうたかたの。あはれは誰
もかはらざりけり。さて修羅道に遠近の。

地「さて修羅道に遠近の。たづきは敵雨は矢先。土は
清剣山は鉄城。雲の旗手をついて。憍慢の剣をそ
ろへ。邪見の眼の光り。愛欲とのるちつうげん道
場。無明も法性も。乱るゝ敵打つは波。引くは潮。
西海四海の因果を見せて。是までなりや誠は最期

の。十念みだれぬ御法の船に。頼みしまゝに疑ひ
もなく。実にも心は清経が。く。仏果を得し
こそ有難けれ。

底本…国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第七輯』大和田建樹 著